

都道府県・ 指定都市番号	33	都道府県・ 指定都市名	岡山県	研究課題番号・校種名	3 (4) 小学校
				領域名	E S D
研究課題	<b>学校全体で取り組む課題</b> (4) E S D を学校全体で体系的に推進するための教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究				
ふりがな 学校名 (児童・生徒数)	おかやまけんつくぼぐんはやしまちようりつはやしましやうがっこう 岡山県 都窪郡 早島 町立 早島 小学校 (児童数 7 8 4 名)				
所在地 (電話番号)	岡山県都窪郡早島町早島 1297-1 (086-482-0063)				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	<a href="http://www.town.hayashima.lg.jp/primaryschool/index.html">http://www.town.hayashima.lg.jp/primaryschool/index.html</a>				
研究のキーワード	単元学習プログラム, E S D カレンダー, 三つの柱に沿った資質・能力表, 保幼小中連携カリキュラム				
研究結果のポイント	○小学校一学年から中学校三学年までの探究的な学びを保障した単元学習プログラムの再構築 ○内容面のつながりだけでなく、能力・態度面のつながりを重視した E S D カレンダーの作成 ○E S D の視点で重視する六つの構成概念と七つの能力・態度を単元ごとに明確にし、E S D において育成すべき能力・態度を、資質・能力の三つの柱（「個別の知識や技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」）に沿って整理 ○校種・学年を横断した連携単元学習プログラムの構築				

## 1 研究主題等

### (1) 研究主題

地域とつながり 未来を拓く はやしまっ子の育成  
 ～E S D の視点を踏まえた 保・幼・小・中連携カリキュラムの構築～

### (2) 研究主題設定の理由

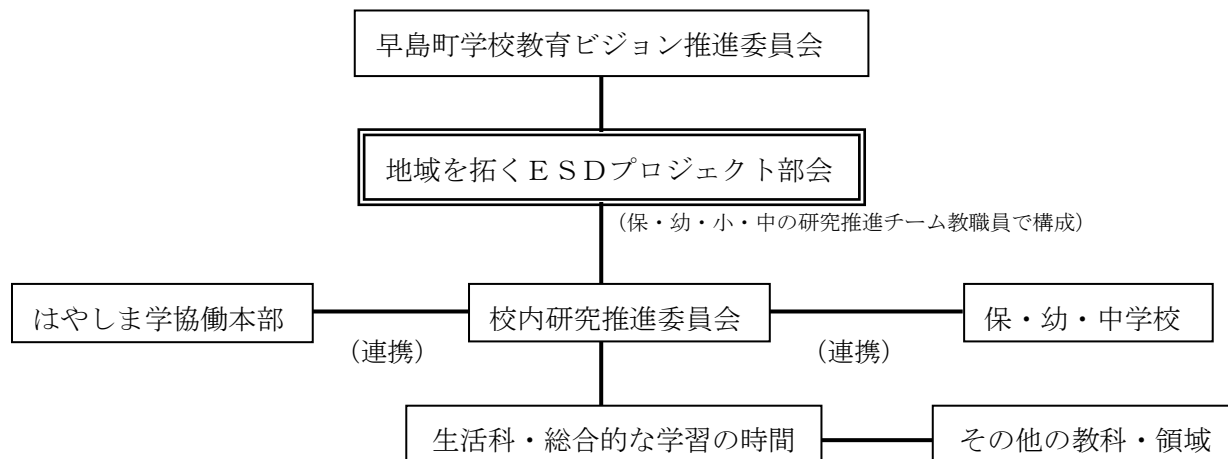
早島町学校教育ビジョンの実現に向けて、本町で育つ子供が、確かな学力を身に付け、広い視野や高い志、たくさんの夢を持つためには、校種を超えた結び付きとそれを支える地域の力が必要である。そこで、小学校を中心に、保幼・中学校とのつながり・関わりを大切にしたプロジェクトチームを創り、E S D の視点を踏まえたカリキュラムを構築し、体系的に推進することで、持続可能な社会づくりの担い手を育てることとする。さらに、町民も共に学び共に育つ「協働・協学・協育」の町づくりを目指し、「はやしま学」の充実や学習支援ボランティアの拡充を図る。

そこで、「地域とつながり未来を拓く子ども像」に、次の3点を掲げ、研究に取り組む。

- ① 早島町の歴史・自然・環境・人権・福祉など、そのすばらしさと課題について探究し、地域の課題解決に向けて奮闘する子
- ② 持続可能な発展に向けて、様々な世代や世界の人々と協力・協働できる子
- ③ 早島から世界への扉を開き、探究してきた学びを提案・発信・行動化のできる子

この研究を通して、実社会や実生活から問いを見だし、探究的な見方・考え方を用いて、主体的・協働的に問題解決に取り組み、学習したことを自己の生き方に生かし、積極的に社会の活動に参画し、次の課題に取り組もうとする態度を育てたい。

### (3) 研究体制



### (4) 1年目の主な取組

平成 29 年 度	<p>★一年目の目標★</p> <p>○育てたい力を明確にした学習プログラムの構築／探究的な学習活動のブラッシュ・アップ／E S Dカレンダーの作成／校種を越えた連携</p> <p>(1) E S Dについての研修・協議</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 5月16日(火)「指導と評価の一体化 (六つの構成概念と七つの能力・態度)」 (岡山理科大学教授 岡本 弥彦先生)</li> <li>・ 8月1日(火)「地域フィールドワーク E S D研修 (教員九グループで地域の宝物発見)」 「探究活動における課題設定の仕方」(岡山理科大学教授 岡本 弥彦先生)</li> <li>・ 8月1日(火), 7日(月)「E S Dカレンダー作成」</li> <li>・ 8月22日(水)「探究活動の質の向上について」(國學院大學教授 田村 学先生)</li> <li>・ 9月～12月 E S Dプロジェクト部会での連携単元学習プログラムの構築</li> </ul> <p>(2) 研究授業・協議</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 6月27日(火) 6年：総合的な学習の時間「発信しよう！早島の宝」</li> <li>・ 10月11日(水) 2年：生活科「あそびの たつ人 あつまれ」</li> <li>・ 11月2日(木) 1年：生活科「あきをたのしもう」(山中教育課程調査官参観・指導助言)</li> <li>・ 11月15日(水) 5年：総合的な学習の時間「防災～みんなで守ろう, みんなの命～」</li> <li>・ 1月24日(水) 3年：総合的な学習の時間「花ごぞ復活大作戦」</li> <li>・ 1月31日(水) 4年：総合的な学習の時間「福祉～早島にあふれる思いやり～」</li> </ul> <p>(3) 子供からの提案・発信・行動化</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 8月3日(木) / 1月13日(土) 子供と大人の意見交流会「熟議」</li> <li>・ 2月3日(土) 子供議会での提案</li> <li>・ 3月3日(土) はやしま子供フォーラムでの提案</li> </ul>
--------------------	--

## 2 研究内容及び具体的な研究活動

### (1) 研究内容

#### ① 生活科・総合的な学習の時間の単元学習プログラムの構築と学習評価

本研究は、生活科・総合的な学習の時間のカリキュラム・マネジメントを柱とし、保・

幼・小・中の相互連携による一貫カリキュラムの構築を目指し、E S Dの視点で重視する六つの構成概念と七つの能力・態度を單元ごとに明確にしていく。また、資質・能力の三つの柱（「個別の知識や技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」）と、E S Dで育成すべき能力・態度の整理を行う。また、教科横断的な単元学習プログラムの実践事例を作成する。

② 提案・発信の場の設定

子供議会，熟議（子供と大人の意見交換会），はやしま教育フォーラム等を地域提案や意見交換のできる場とし，積極的に発信するとともに，行動化へと結びつくよう意欲を高める場とする。

③ I C T等の積極的な活用

表現活動を豊かにするために，子供の学び合いがI C T等を媒介として効果的に活用できる授業の工夫や，子供自らがI C T等を活用した提案発表をするなど，地域や世界への発信を視野に入れた取組とする。

(2) 具体的な研究活動

- ① 年度当初にE S Dについての研修会を開催し，E S Dの視点を取り入れた六つの構成概念と七つの能力・態度についての共通理解を図る。
- ② 六つの構成概念と七つの能力・態度の十三枚のマグネットカードを作成し，通常の授業で活用していくことで，教師と子供が共通理解して学びを深めていくようにする。
- ③ 学年ごとにE S Dカレンダーを作成する。
- ④ 單元ごとに探究的な学びが保障されているか，課題設定，情報収集，整理・分析，まとめ・表現・行動化の四つのプロセスについて見直す。
- ⑤ 單元において育成すべき資質・能力を整理する。
- ⑥ E S Dの視点を取り入れた生活科，総合的な学習の時間の学習指導案を作成する。
- ⑦ 研究授業後に協議会を行い，成果と課題を明確にし，更なる改善を図る。
- ⑧ 子供からの地域提案や発信内容の充実を図る。

(3) P D C Aサイクルへの取組について

○第六学年児童対象に行った意識調査結果（平成30年1月第二回実施、4月第一回との差△）

	1.当てはまる	2.どちらかといえ ば当てはまる	3.どちらかといえ ば当てはまらない	4.当てはまらない
㊦学校が楽しい	77.6%(△3.7)	18.6%	1.9%	1.9%
㊧みんなで何かを するのは楽しい	79.4%	15.0%	2.8%	2.8%
㊨授業に主体的に取 り組んでいる	54.2%(△7.5)	39.3%	6.5%	0%
㊩授業がよく分かる	58.9%	34.6%	6.5%	0%
㊪ほかの人の意見を 大事にして自分の 意見を考えている	51.4%	43.0%	5.6%	0%

上記の結果から、どの質問項目も「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」を合計した割合は、90%を超えていることが分かる。特に、「㊦学校が楽しい」「㊧みんなで何かをするのは楽しい」と感じている児童の割合は高いが、その一方で、「㊨授業に主体的に取り組んでいる」「㊩ほかの人の意見を大事にして自分の意見を考えている」の項目では、「当てはまる」と回答した児童の割合は半数程度である。

この調査結果を基に、特に教師が意図的に児童に身に付けさせたい力は、E S Dの視点に立った学習指導で重視する能力・態度で言えば、「批判的に考える力」「コミュニケーションを行う力」であると考えられる。こうした力が身に付くように、意図的に取り組む必要がある。

### 3 研究の成果と課題（○成果●課題）

- 小・中ごとに、総合的な学習の時間の単元学習プログラムにおいて、「探究活動の学習」となっているかの視点で見直しを図り、小中一貫カリキュラムをブラッシュ・アップした。
- 各学年で、資質・能力の三つの柱に沿った単元学習プログラムを作成することで、六つの構成概念と七つの能力・態度との関係が明らかになった。
- E S Dの六つの構成概念と七つの能力・態度をカード化して、授業で随時活用することで、子供の考える視点が広がるとともに深まりが見られた。例えば、六つの構成概念を課題解決の視点として与えたり、子供の具体的な言葉に置き換えたワークシートを用いたりすることで、思考が広がり大変有効であった。
- 保幼と小1、小4と中1のように、連携を図りながら校種・学年を越えた単元学習プログラムを作成することで、互いに刺激を受け、課題探究や行動化への意欲向上につながった。
- 下学年から発達段階に沿って六つの構成概念に慣れ親しみ、積み上げていくことで、より教育効果が高まると考えられる。そこで9年間のゴールを見据えた系統性のある具体的なグレード表を作成し評価基準を明確にする必要がある。
- 単元の導入時の「課題意識の持たせ方」が最大の課題である。共通の体験活動だけでなく、適切な映像資料を活用するなど、更なる工夫が必要である。
- 生活・総合的な学習の時間の「テーマ学習」に終わらず、教科・領域での教科横断的な単元学習プログラムを開発し、E S Dの視点を取り入れた深い学びにつなげていく。
- P D C Aサイクルの取組として、意識調査の項目をE S Dの視点に立って見直す必要がある。

### 4 今後の取組

- 一年目の研究で明らかになった成果と課題を基に、E S Dの視点を取り入れた生活科・総合的な学習の時間の9年間の単元学習プログラムのカリキュラムを完成する。
- 教科・領域での教科横断的な学習プログラムの開発を行い、E S Dの視点を踏まえた教科授業の充実を図る。
- E S Dの目標を下位目標に設定し、その目標に到達することで、教科の目標を達成することができるような授業づくりを目指す。
- 保幼・小、小・中などの校種を越えたつながりを大切にしながら、発達段階に合わせて計画的にICTなどを活用した交流活動を行うことで、系統的な探究活動の充実を図る。
- 六つ構成概念と七つの能力・態度を学年ごとに整理したグレード表を基に、評価基準を明確にする。